

第24回「日韓高校生交流キャンプ」参加生徒の感想文 ④

「日韓高校生交流キャンプに参加して」

野田 駆

慶應義塾湘南藤沢高等部 3年



僕はこのキャンプに参加するため、約十二年ぶりに韓国へ渡った。十二年前、僕は釜山に行ったことがあったが、隣国であるにも関わらず、それ以降は行ったことがなかった。

金浦空港から平昌に向かう途中、僕はまず初めに韓国の景観が日本ととても似ていることに気が付いた。例えば、高速道路は日本語がそのままハングル表記になったのか、と思わせるほど似ていて、サービスエリアの作りも似ていた。

僕は、韓国は日本とあまり変わらないなと思いながら会場入りしてしまった。しかし、僕は韓国語を知らないどころか、韓国の文化や人についてもあまり知らなかった。韓国に到着し、同じチームのメンバーに会い、まず驚いたことは韓国人がみんな日本をよく知っていて、また日本語を話せる高校生がとても多いことだ。僕がそれまでに抱いていた韓国のイメージは食べ物がおいしい、オリンピックが開催されるくらいだったが、何も知らない自分が恥ずかしくな

り、もっと韓国について知識を深めておくべきだったと感じた。

五日間の間、韓国の高校生の「おもてなし」の心を持ったやさしさ、温かさを感じることができた。二日目の夜と一緒に韓国の辛いラーメンを買ってきて、それにお湯を入れて作ってくれたり、韓国人が食べている韓国で一番辛いといわれているラーメンを食べさせてくれたりした。また、韓国語の言葉の意味がわからない時、質問すると、英語で一生懸命説明してくれた。

チームの仲間と仲良くなれたことも勉強になった。アニメ「名探偵コナン」が好きな子もいれば、日本のカードゲームが好きで大会に出ている子がいたり、外国語の授業で日本語を取っている子もいた。今回のキャンプでは、普段旅行しているだけでは絶対に出会うことのできない現地の高校生と触れ合うことができたと思う。また、平昌五輪開催前で、一緒に会場を視察した時に、韓国人も日本人と同じように会場の建

設現状などをあまり把握できていないことにも気が付くことができた。

僕たちのチームの事業案は新再生可能エネルギーを使って、「グリーンオリンピック」を作るというものであった。僕は韓国人のパートナーと電気自転車の設置について議論を繰り返して、僕たちの計画の一部として発表した。僕たちは前日夜遅くまで準備し、調べものしすぎて、当日は発表時間を大きく上回るほどであった。発表後も、チームで部屋に集まり、メンターさん

を呼んで、ありがとうパーティーを行ったり、夜遅くまでいろいろな話をしたりした。

韓国での五日間はとても早く過ぎ去ってしまったが、それは僕たちが真剣にこのキャンプに向き合い、事業案を考え、学び、また全力で限りある時間を楽しもうとしたからだと思う。これこそが僕が目指していた真の国際交流であり、これからもこのキャンプでの仲が一生継続できるようになることを願っている。

「一番特別で、幸せだった夏休み」

鄭 治勳 (ジョン・チフン)
店村高等学校 2年



日韓高校生交流キャンプは、高校2年の夏休みを、今までで一番充実したものにしてくれた本当にありがたいキャンプだった。友達の誘いで偶然参加申込書を出したが、最初は、先生からの推薦でもなく、ポスターや公式募集案内を見たわけでもなく、ただ友達の誘いだったので、参加しようかしまいかなり悩んだ末、参加を決心したのだが、今、あの時の私に戻れるのであれば、「必ず参加しなきゃ！」と迷わず決めたいと思う。

初日、韓国の学生たちが先に会場に集まって、日本の学生たちの到着を待っている間、私は緊張と期待で胸の高鳴りが止まらなかった。一週間を一緒に過ごす日本の学生たちはどんな人たちなんだろう、今まで学んできた日本語で日本人とコミュニケーションをとるのは初めてなのに、私の発音でうまく通じるだろうか、と心配でいっぱいだった。しかし、日本の学生たちが会場に入ってきた瞬間、意外と日本人と韓国人の区別がつかないくらい似ていることに却ってびっくりした。実際に私も他のチ

ームの韓国人のメンターさんを日本人だと錯覚して日本語で話しかけたくらい日本人と韓国人の区別がつかなかった。

次に驚いたのは、日本人の英語能力だった。日本人は英語が話せないという固定観念があったのだが、先に英語で話しかけてきたときにはびっくりした。しかも発音もとてもきれいだった。初対面から私の間違った固定観念が一つ一つ崩れていき、そのショックで自己紹介もまともにできなかったことを覚えている。

私たちの初めての共同作業は、チームのみんなが持ってきた写真を集めて模造紙に貼る作業だった。ここで、私は韓国人の典型的な「パリパリ(速く速く)精神」が自分も知らないうちに自分の身に付いていたことに初めて気が付いた。韓国人は、作業をするときに、それぞれ役割を分担しては可能な限り短時間で終わらせることを最優先にする反面、日本人は完成度を高めるために集中して作業することを最優先にしていた。このような考え方や仕事の進め方の違いはあったものの、お互いにお互いを配慮し、足りない部分を補い合いながら、私たちはシナジー効果を生み出したのではないかと思う。

二日目は、私たちが集まって何かの作業をする、というよりたくさんの方のことを学ぶ、の日だった。午前中は平昌(ピョンチャン)冬季オリンピックについて様々なことを教えてもらった。冬季オリンピックの種目について教えてもらったり、競技場を見学し

たりした。午後は、私たちのチームのカテゴリーは「サービス」だったので、ホテルでサービスの体験をすることになった。ホテルの仕事内容について、食事マナーについて、そしてワインについての講義を聞いた。これから私たちが企画していくサービス事業について参考になることが多く、たくさん勉強することができた。

三日目は、事業発表会の準備の日だった。私たちのチームはどのようなサービス事業を企画していくかについてみんなで一緒に考えた。チームメイトそれぞれが考えているサービスについての意見をみんなで話し合っ共有し、お互いの意見を組み合わせるより良い企画案に発展させていくべく、みんな一生懸命に話し合いに取り組んだ。発表する企画案が決まり、私たちは各自役割を分担して発表会の準備に取り掛かった。作業中もお互いに助け合いながら細かいところまで気を抜かずしっかりと準備していた。役割を分担して進めながらもお互いの足りないところは補い合い、助け合いながら夜遅くまで作業をしていたこの時が、うちのチームのチームワークを確固たるものにしてくれたキラキラと輝きを放った貴重な時間だったと思う。

発表会の四日目、一睡もせずに朝を迎えた。朝食より睡眠をとりたかったが、最高のコンディションで発表に挑みたかったので、チームの全員で朝食を食べに行った。私は発表者ではなかったが、裏で色々と準備することが多かった。発表は成功裏に終

わり、みんなで協力し合ったおかげか、大賞はとれなかったが、「Best Performance 賞」といううちのチームに一番相応しいと思われる賞を受賞できた。

終了式の後は、「ミニ・オリンピック大会」に参加して楽しんだ。各ゲームでは、言葉が上手く通じず、上手く戦略を立てることが出来なかったが、チームメート10名全員の心は一つになっていた。ゲームの成績がよくななくても、みんなでゲーム自体を楽しみながら今までで一番楽しい時間を過ごした。その後続いた、「友達に一言(寄せ書き)」では、最後の夜が過ぎ去る前に、みんなに伝えられなかった言葉、謝りたかったこと、とても感謝したかったこと、などなどを手書きで一生懸命に書き込んだ。

翌日、つまりキャンプの最終日、日本のみんなとも韓国のおみんなともお別れをする日。昼食の後、別れるまで残ったわずかの時間の間、みんな笑顔で過ごそうと必死に

頑張った。しかし、いざ日本の学生たちが空港行きのバスに乗り込んだ瞬間には、どうにもならなかった。二度と会えないとも思っていなかったし、離れていてもチャットやメールで連絡はできると分かっていたけれど、お互いの顔を見ながら話せるその日までは、かなり時間がかかるということも分かっていたから、・・・私たちはお別れを告げてそれぞれ行き先の違うバスに乗り込んだ。

キャンプが終わった今は、日本の学生たちと過ごしたあの時間がまるで夢のようで、今までで一番楽しい夏休みを過ごせたと記憶している。キャンプに参加しないで学校で勉強していたら成績がどれだけ上がったか分からないが、「日韓高校生交流キャンプ」は学校の成績とは比べ物にならない程、かけがえのない、私の人生で一番輝いていた瞬間として私の記憶に永遠に残ることだろう。

「ここにしかない出会い」

市川 実花

早稲田大学本庄高等学院 3年



日韓高校生キャンプは、とにかく素敵な出会いの連続だった。韓国の学生はもちろん、全国から集まる日本の学生も皆ひとり

ひとり個性を持っていて、キラキラ輝く子たちばかりだった。羽田空港に集合したときから様々な方言が飛び交い、日常とはか

け離れた感覚に興奮したのを覚えている。キャンプを振り返ったとき、様々なことが思い返されるが、ここでは3つのことに言及しようと思う。

一つ目、協力してひとつのものを作り上げることの達成感。正直、名前も知らなかった人と、たった数日間で心を許して話せるほど仲良くなれるとは思っていなかった。事業アイテムを考える際には、真剣にお互いのアイデアをぶつけ合い丁寧に話し合っていく中で、チームメンバーの得意なことが分かったり、協力することで新しい考えが生まれることの楽しさを実感した。最後にプレゼンが終わったときには、私の日本語力では言葉にできないような達成感を感じた。

二つ目、キャンプ中のコミュニケーションについて。私は最初、全てのコミュニケーションは英語で行われるものと思っていた。私の経験上、母語が異なる集団においてはそれが一番自然で、そして簡単だからだ。しかしこの日韓高校生キャンプでは、どちらかという日本語や韓国語を聞くことの方が多かったように思う。母語を持ちながら、英語以外にもう一つ言語を学び、そしてそれを積極的に使おうとしている同世代の高校生を日韓双方で大勢目の当たりにし、自分ももっと頑張らなければならないと思った。私のチームでは、日本人と韓国人から出た意見をほぼ同時通訳的にとりまとめ、他のメンバーに説明してくれる韓国の女の子がいた。彼女がいなかったら、

きっと私たちのチームは最終プレゼンにたどり着けなかっただろう。

三つ目、新しい考え方を得たこと。幸運なことに、私は金会長とのディナーに同席させていただき、実際に話を伺うことが出来た。その席で、学生側からの「リーダーに必要な素質は何か」というような質問に対し、会長が「自己犠牲」と仰っていたことがとても印象に残っている。リーダーとは、仲間の意見をももちろん参考にはするが、最終的に自分の意志で決断するものだと思っていたからだ(今もそう思っているが)。そういう考え方もあるのだなと思うと同時に、自分がもし今後リーダーと呼ばれる立場に立つことがあったとしたら、どうするだろうかと考えた。また、人との関わりの中で自分の意見と他者の意見の折り合いをつけるという広い意味では、リーダーでなくても考えるべきことだとも思った。

一度しかない高校3年生の夏休み、ただ学校から与えられた課題をこなしたり、普段から見慣れた景色でいつもと同じメンバーで過ごすだけでは得られないものが沢山あった。平昌オリンピック2018を目前に、このタイミングで、このメンバーで、5日間過ごせたことはとても幸運なことだと思う。

最後になりますが、このような素晴らしい経験をさせていただくにあたり、関わってくださった全ての方々に感謝を申し上げます。

